

# 親鸞聖人と弥陀仏土 —— 真仏土巻における曇鸞引文を中心に ——

富 島 信 海

## 序 論

## 本 論

### 第一章 弥陀仏土論の相承

親鸞の弥陀仏土理解について最もよく窺えるのが『教行信証』第五巻である。真仏土巻は、巻頭・巻尾の御自釈に挟まれる形で、主に「大経」・「涅槃経」・曇鸞・善導の引用文によって構成される。

曇鸞引文は『教行信証』に多く引用されるが、親鸞以前の時代に多く引用したのは道綽や隆寛に限られる。そこで、本稿では、真仏土巻における曇鸞引文を中心に、その引用意図を通して親鸞の弥陀仏土理解について考察を進める。

先ず、親鸞に影響した弥陀仏土論を考察し、その思想的背景として捉える。続いて『教行信証』内における真仏土巻の位置付けを把握する。更に、『教行信証』唯一の親鸞真筆・坂東本における引文の収集と配置の様相について、真仏土巻曇鸞引文周辺を中心に考察する。これによって、親鸞の弥陀仏土に対する見解の形成過程や、その変化の様子について明らかにする。

『教行信証』には、『無量寿経』、曇鸞『往生論註』、善導『観経疏』の三書が頻繁に引用され、これは真仏土巻引文の主たる構成要素と一致する。そこで、これらを中心に、弥陀仏土論の展開について考察する。

初めに、『無量寿経』である。ここでは、弥陀仏土について三点が指摘できる。第一に、法蔵菩薩の発願修行に報いて成立した弥陀仏土について、「法蔵菩薩今已成仏現在西方去此十万億刹其仏世界名曰安楽」(「大正蔵」一一・二七〇上)とあり、西方を方処として、身に苦難がなく、ただ楽を受けるといふ意の「安楽」等の語を仏土名とする。第二に、弥陀仏土の莊嚴の具体的成就相を詳しく示し、七宝に満ちた地・池・楽音・樹・講堂等の園土の莊嚴相が説かれ、光明に満ちた世界として描かれる。その特徴としては、「其仏国土

清淨安穩微妙快樂次於無為泥洹之道」（大正藏）二二・二七一下）等とある。第三に、三輩段では、上・中・下輩に共通する往生の因として「念無量壽仏」が挙げられ、臨終にはそれぞれ阿弥陀仏や化仏の来迎引接、夢中に見仏して往生することが述べられる<sup>①</sup>。また、胎化段では、修諸功德・修諸善本の者は弥陀仏土に往生すると言うが、これは仏智疑惑によって三宝を見聞できない宮殿に五百年留まる胎生であり、一方、仏智を明らかに信する者は信心回向すれば安樂国土の七宝蓮華の中に自然に化生し、忽ち諸菩薩の様に身相光明・智慧功德を具足成就すると言<sup>②</sup>う。

次に、曇鸞は天親「浄土論」の偈文を五念門に配当して註釈する中、弥陀仏土について言及し、「安樂」や「浄土」の語を用いて弥陀仏土を示す。天親道の「浄土論」は觀察門を中心に構成され、三嚴二十九種が広く説かれるが、曇鸞は「論註」上巻において、これらを法蔵菩薩の発願による諸相の成立過程と解釈し、下巻の觀察体相章ではその成就相を述べた。また、浄入願心章では、三種莊嚴は法蔵菩薩の清淨願心によって成就した相であるといひ、広相の三嚴二十九種と略相の入一法句が相入関係にあることを、法性と方便の二種法身の由生由出関係によって説明し、更に一法・清淨・真實智慧無為法身の三句は展転相入関係にあるとした。この広略相入については、道綽「安樂集」に引用・継承されている。また、「浄土論」長行の入第四門に、浄土に入ると法味樂を受けると言うが、この「樂」については、「論註」下巻の名義攝対章で、樂三種のうち第三

に智慧所生の法樂樂を挙げ、利行満足章では「種種法味樂」について、清淨味・撰受衆生大乘味・畢竟住持不虛作味・類事起行願取仏土味の四種に釈している<sup>④</sup>。尚、「讚阿弥陀仏偈」（以下、「讚偈」と略す）では、弥陀仏土を「安樂」「阿弥陀浄土」等と示し、仏・菩薩・国土の順に莊嚴功德を讚嘆し、最後に龍樹讚と曇鸞の自督を述べる。国土莊嚴では、

妙土広大超數限 自然七宝所合成 仏本願力莊嚴起 稽首清淨大撰受

世界光曜妙殊絶 適悅宴安無四時 自利他力円満 帰命方便巧莊嚴  
（大正藏）四七・四三上

として、広大なる安樂国土の莊嚴は阿弥陀仏の本願力より起こり、自利他円満した方便巧莊嚴であることを述べ、以下、「無量壽経」に基づいて宝地・道場樹等を讚じている。また、曇鸞撰とされる『略論安樂浄土義』でも弥陀仏土についての説示がある<sup>⑤</sup>。

次に、善導は、隋・唐代の仏土論を受けて弥陀仏土に対する見解を示した。梁・真諦等の訳経以後、三身説を中心とする仏土分類や弥陀仏土の判定が盛んとなったが、仏土分類の嚆矢たる淨影寺慧遠等の聖道諸師は凡夫の往生可能な弥陀仏土を低位に判じて応土とする説を提唱し、また、撰論家と呼ばれる者は、無著「撰大乘論」や世親「撰大乘論釈」に基づいて「観経」下下品の十念往生を方便視し、凡夫の即時往生を否定した。これらに対し、道綽は慧遠の説を批判して弥陀報土説を述べ、これを承けた善導は、「玄義分」和会

門において九品の階位と別時意趣について会通したのち、二乗種不生に於いて、『大経』第十八願等に依つて弥陀仏土の成立と本質を述べることで弥陀報土説と五乗齊入の凡夫入報を立証した。先ず、阿弥陀仏は「報」か「化」かという問いを立て、「是報非化」と判じる。道綽の挙げた『大乘同性経』で「西方安樂阿弥陀仏は報仏報土」とした上で、『大経』第十八願に注目して本願に報いた土であること、『観経』で化仏を伴つて臨終來迎する阿弥陀仏を報であるとし、また報と応の二身は翻訳の前後による眼目の異名であると述べる。更に、『大経』第十八願によつて仏願力を強縁として五乗が齊しく報土に入ることを述べ、凡夫入報を証明した。また、「序分義」にも弥陀仏土は四十八願によつて起こつた事を明かし、『法華讚』では「自然即是弥陀國」として無漏無生にして真であること、「極樂無為涅槃界」として涅槃界で生じ難いことから釈尊が弥陀を専らに念すべきことを示した。<sup>④</sup>

以上は印度・中国における仏土論の展開であるが、親鸞への影響については、日本におけるそれも考慮しなければならない。まず、源信は『往生要集』大文第十問答料簡・極樂依正で天台智顛や淨影寺慧遠の説を挙げつつ、道綽説を繼承したことが窺え、<sup>⑤</sup>同じく往生階位では、『菩薩處胎経』の「懈怠界」について、懷感「群疑論」の釈を基に報化二土を弁立して雜修による執心不牢を誡めた。<sup>⑥</sup>一方、法然は善導説に依拠し、『選択集』本願章には弥陀仏土は本願の所成で、専修念仏を以て往生の行となす土であると述べている。<sup>⑦</sup>

このように、『無量寿経』に見られるような弥陀仏土の経説等を基点として、極樂淨土の成立と莊嚴相、広略相入、弥陀報土の立証へと弥陀仏土論の中心点は変遷しているが、これらを背景として親鸞の見解が形成された。

先ず、經典上の弥陀仏土の解釈について、『教行信証』行巻「正信念仏偈」前半の依経段には、法蔵菩薩の發願と長劫の修行による淨土の建立が示される。<sup>⑧</sup>『淨土和讃』では、初めに讚弥陀偈讚を置き、続く大経讚には、至心信樂欲生の三心は真實報土の因となり、仏智不思議を疑うと辺地懈慢にとまるといい、この真實報土を「自然の淨土」と示す。<sup>⑨</sup>観経讚には、淨土の機縁が熟して釈尊が安樂世界を選ばせたと言ふ。<sup>⑩</sup>諸経讚では、『法華経』によつて法身が無礙光仏と称して安養界に影現すると言ひ、『涅槃経』によつて平等心を得るを一子地といい、一子地を仏性と名付けて安養界に至つて悟ること、如来は涅槃であり涅槃を仏性と名付け、凡地では悟れず安養界で証することを述べる。<sup>⑪</sup>また、『尊号眞像銘文』では、安養とは弥陀を讚じた言葉で、本願力に乗ずれば本願の実報土に生まれることに疑いなければ行き易いと言ふ。<sup>⑫</sup>

弥陀仏土論については、『正信念仏偈』依釈段龍樹讚に「証歎喜地生安樂」、天親讚に「得至蓮華藏世界」、曇鸞讚に「報土因果顯誓願」「必至無量光明土」、道綽讚に「至安養界証妙果」、源信讚に「偏歸安養勸一切」「報化二土正弁立」、源空讚に「速入寂常無為樂」、と弥陀仏土を指す語を示しつつ、報土に至つて証果を得ること

とが示される。善導讚に弥陀仏土を示す語はないが、「入出二門偈」では「到安樂土必自然即証法性之常樂」（『真聖全』二・四八四頁）としている。「高僧和讃」では、天親讚に安養莊嚴は唯仏与仏の知見であつて、究竟せること虚空にして廣大にして辺際ない世界であり、本願力に乗ずれば報土に至つて速やかに無上涅槃を証し、大悲をおこしてこれを回向と名付けると讚ずる。曇鸞讚に、一切道俗は安樂を除いて帰すべきところなく、安樂仏国に生ずることは畢竟成仏の道路で、安樂仏国にいたるには名号と眞実信心ひとつにて無別道故と説いたことを讚ずる。善導讚に、願力成就の報土には如来の弘誓に乗じて到るとし、弥陀仏土を「自然の淨土」「淨土無為」として、「念仏成仏自然なり 自然はずなはち報土なり」と讚ず。源信讚に、專雜を定めて「報化二土」として「報の淨土」の往生は多くないとして、偏に弥陀を称して淨土に生まれると述べたと讚ずる。なお、道綽讚や源空讚には直接弥陀仏土を指示する語は見られない。また、『唯信鈔文意』には『法事讚』の「極樂無為涅槃界」について、「極樂」とは安樂淨土で、「無量壽經」等に基づいて「よろずのたのしみつねにしてくるしみまじはらざるなり」とし、『讚偈』と同じ曇鸞は「安養」とほめたことを述べ、「淨土論」には「蓮華藏世界」と言い、また「無為」とも言う」と述べる。また「涅槃界」については無明の惑いをひるがえして無上覺をさとする事で、「界」とは悟りを開く境界であると言う。安樂淨土は苦がなく諸樂のみ受ける安養界であり、自然無為の涅槃界であつた。

一方、仏土理解の枠組みとしては、『末灯鈔』第八通に、法然の「淨土宗大意」における法身土・報身土・応身土・化身土の四土説を継承し、安樂淨土は報土であるとする。『愚禿鈔』卷上では、先ず仏土を仏と土に分け、土について法身土・報身土・応身土・化身土に四分し、さらに報土を弥陀・釈迦・十方の三種に、弥陀化土を疑城胎宮と懈慢辺地の二種に分類する。弥陀について抽出すると、報身土たる弥陀仏土は眞土と化土に分かれ、後者について疑城胎宮と懈慢辺地の二土があるとす。この眞土は、『三經往生文類』の大經往生の眞実報土に当たり、他方、疑城胎宮は小經往生に引用された「無量壽經」第二十願成就文、懈慢辺地は觀經往生に引用された「無量壽經」道場樹願成就文や「往生要集」往生階位の文が該当する。

このように、親鸞は法然に倣つて仏土を四種に分類し、弥陀仏土を四十八願に報いた土とする。「四十八願莊嚴淨土」は善導・源信・源空等に共通して見られるが、親鸞は更に「無量壽經」胎化段によつて胎生・化生を分別し、生因三願の眞仮と相應して、難思議・双樹林下・難思の各往生に即して、第十八願による化生の眞実報土、第十九願・第二十願による胎生の方便化土の二つに分化した。眞実報土は、自然の淨土であり、偏に念仏して本願力に乗ずれば「大經」第十八願の信心を因として本願所成の眞実報土に生じて速やかに仏性・涅槃の妙果を証すると言う。一方、仏智疑惑にして修諸功德・修諸徳本の者は懈慢辺地に留まると言う。これは源信の報

化二土から報中垂化に発展したもので、同じく「愚禿鈔」巻上に教法について「報化二土対」とするのと同様である。<sup>⑦</sup>

以上の事から、経説や師釈を基にして、親鸞は、

①「無量寿経」の記述を中心に、信心の正因によって往生して証果を顕す真報仏土である。

②その真実報土を「蓮華藏世界」「無量光明土」「自然の浄土」等と述べる。

③道綽・善導・法然の釈から、仏土を法・報・応・化の四種に分類し、弥陀仏土を報身の土とした。

④三部経や源信の報化二土説から、弥陀報土を更に真土と化土に分立した。

といった見解を持つに至った。

## 第二章 真仏土巻の構成

続いて、『教行信証』における弥陀仏土或いは真仏土巻の位置について把握すると共に、真仏土巻の構造について考察する。その基準として、各巻の題号や細註が挙げられる。坂東本真仏土巻の題号は「顕浄土真仏土文類五」であるが、この「浄土」の語は後に加筆され、化身土巻でも「浄土方便」が追加されていることから、題号の「浄土」とは「浄土方便」に対する「浄土真実」であり、浄土の法門を示すものである。

教巻では、『大無量寿経』を真実の教とし、浄土真宗の法義につ

いて往相と還相の二種の回向があること、前者について真実の教行信証があることが述べられる。この「無量寿経」四十八願のうち、

第十七願、第十八願、第十一願、第十二・十三願、第十九・二十願が行巻以下の各巻に配当され、それらは各巻標挙に反映されている。

次に、行巻偈前の文から真仏土の位置付けを考察する。同釈では、

凡そ誓願に就いて真実の行信有り、亦た方便の行信有り。其の真実の行願は諸仏称名の願なり。其の真実の信願は至心信樂の願なり。斯れ乃ち選択本願の行信なり。其の機は則ち一切善悪

大小凡愚なり。往生は則ち難思議往生なり。仏土は則ち報仏報土なり。斯れ乃ち誓願不可思議一実真如海なり。大無量寿経の

宗致、他力真宗の正意なり。  
〔定親全〕一・八四頁

と、真実教たる『大無量寿経』において如来の超発した四十八の誓願について、真実と方便の行信があり、このうち真実の行信についての願・機・往生・仏土を列挙する。真実の行信や機については行

巻・信巻、往生については証巻、仏土については真仏土巻に振り分けられ、各巻の標挙・細註に表れている。

行巻や信巻では、真実報土の真因として示されるものが多くある。例えば、行巻六字釈は善導「玄義分」の六字釈を承けたものである

が、「阿弥陀仏」の四字を「即是其行」とすることについて、

即の言は願力を聞くに由りて報土の真因決定する時剋の極促を光闡せるなり。  
〔定親全〕一・四九頁

と言う。また、行巻両重因縁釈では初重（名号の因・光明の縁）と

後重（信心の内因・光明名号の外縁）の因縁によって報土真身の果を生ずるとする。行一念釈では称名破満の因によって、

速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す。

〔定親全一・七〇頁〕

と言う。同様の記述は、一乗嘆徳や信巻信樂釈、信一念釈にも見られ、真仏土とは信心・光明名号等の内外の因縁によって速やかに到って大涅槃の証果を得る土、本願に報いた清浄土であることが分かる。

また、証巻には直接真仏土を顕す語は示されないが、既に行巻・信巻によって示された真実の行信、機に基づき、今度は弥陀仏土に往生して大涅槃を証することについて示される。大証釈では、

然れば弥陀如来は如より来生して、報応化種々の身を示し現し  
たまふなり。  
〔定親全一・一九五頁〕

と弥陀仏の仏身に即して述べ、続く「無量寿経」と「如来会」の第十一願及び願成就文以下では衆生が往生後に得る無上菩提の証果について顕す。続く「浄土論」は「論註」下巻觀察体相章の妙声功德成就・主功德成就・眷属功德の連引と大義門功德成就、清浄功德成就がそれぞれ引用される。これらは極樂世界における弥陀仏とその眷属についての引用で、煩惱の成就した凡夫が念仏して浄土に生じて涅槃分を得て教化地に到るのは弥陀仏の善住持力によるものであることを述べている。このうち、清浄功德成就文は真仏土巻「論註」引文第一と共通する文である。更に、続く「安樂集」では

「讚偈」菩薩功德の偈頌が子引され、終わりの四法結釈も「論註」下巻の浄入願心章を承けた表現となっている。

また、還相回向釈は引文が「論註」のみによる構成である。先ず「浄土論」長行の出第五門と「論註」下巻起観生信章の回向門のうち還相に就いての文を引用し、次に「論註」下巻・觀察体相章不虛作住持功德成就の「即見彼仏」から利行満足章出第五門の「第五功德相」までを「言」で引用する。浄入願心章では、四十八願等の清浄願心による莊嚴であること、広略相入、二種法身の相即、一法句の内容を示している。利行満足章の五果門では、因位の法蔵菩薩の五念門行と果位の弥陀仏の自在神力が回向され、入出共に弥陀仏の本願力回向に依るものとし、真仏土が衆生が入らしめられる世界であると同時に、還相回向の菩薩の根源であると捉えている。

一方、誓願中の方便行信について行信・機・往生・仏土を明かすのが化身土巻であり、三経隠顕の終りには、行巻偈前の文と同じ構造で方便真門の誓願についての行信・願・機・往生・仏土を挙げて「仏は即ち化身なり、土は即ち疑城胎宮是れなり」〔定親全一・二九三頁〕とする。この化身土について、真仏土巻真偈対弁では、然るに願海に就いて真有り仮有り。是を以て復た仏土について真有り仮有り。（中略）既に以て真仮みな是れ大悲の願海に酬報せり。故に知んぬ報仏土なりといふことを。

〔定親全一・二六五・二六六頁〕  
と述べ、願海に真仮がある様に、仏土についても真仮の別があるこ

とを示し、大悲の願海に報いた仏身・仏土について第十八願に報いた真仏・真土が有る一方で第十九・二十願に報いた化身化土の存在を示した。更に、

まことに仮の仏土の業因千差なれば土も復た千差なるべし。是れを方便化身化土と名づく。眞仮を知らざるに由りて、如来広大の恩徳を迷失す。茲れに由りて今真仏真土を顕す。

〔定親全〕一・二二六頁

として、仮の仏土として方便化身土を示し、業因が千差であるために土も千差となると言い、眞仮の知・不知による得失を示している。この化身土については化身土巻の冒頭に、

謹んで化身土を顕さば、仏は無量寿仏觀經の說の如し、真身觀の仏は是れなり。土は觀經の淨土是れなり、復た菩薩處胎經等の說の如し、即ち懈慢界是れなり、亦た大無量壽經の說の如し、即ち疑城胎宮是れなり。

〔定親全〕一・二二九頁

と云い、眞仮対弁で示した方便化身土とは、具体的には「觀經」所說の土、「菩薩處胎經」等の懈慢界、「大無量壽經」所說の道場樹等の莊嚴及び疑城胎宮等を指す。「懈慢界」については「懈」に「オコタル」、「慢」に「アナトル」と左訓を施して、迷失によつて生じる世界であることを詳らかにしている。

続く要門釈では、願文として「無量壽經」第十九願と「悲華經」を挙げ、この願成就文は「無量壽經」三輩段と「觀無量壽經」定散九品の文であると指摘する。更に「無量壽經」道場樹の文と胎化段、

善導「定善義」、憬興「述文贊」を経て源信「往生要集」大門第十問答料簡第二往生階位を引用する。この引文では「菩薩處胎經」の「懈慢界」についての文を懷感「群疑論」で解釈し、専雜によつて往生する土が報化に分かれると言い、更に、

爾れば、夫れ楞嚴の和尚の解義を按ずるに、念仏証提門の中に第十八の願は別願の中の別願なりと開顯したまへり。觀經の定散諸機は、極重惡人唯稱弥陀と勸勵したまへるなり。濁世の道俗善く自ら己れが能を思量せよと、知るべし。

〔定親全〕一・二七五頁

と、これらを受けて御自釈を設け、「大經」と「觀經」の教説を基に、機の能力を考慮して第十八願に依るべきことを示している。更に、「大經」と「觀經」の三心を会通する中で、

然るに二善三福は報土の真因に非ず。(中略)經には教我觀於清淨業処と言へり。清淨業処と言ふは則ち是れ本願成就の報土なり。

〔定親全〕一・二七六頁

と云い、「觀經」所說の土も本願に報いた土であるが、定散二善、世戒行三福の行は眞實報土に入る正因とはならないことを示す。更に、三經隱顯で、便往生は胎生辺地・双樹林下往生とし、即往生は報土往生と述べた上で、「報土の眞因は信樂を正となす」と、信卷に述べたことを再説し強調している。

このように、眞仏土巻は前四巻に対して教・行・信・証の根源である眞仏土について顯す一方、第六巻に対して化身土との相違を示

す一巻であると言える。

続いて、その真仏土巻の構造について考察する。真仏土巻は、巻頭巻尾の御自釈に、經・論・釈の引文が挟まれる形で構成されている。御自釈では、「大經」や「淨土論」の句によって真仏を四種、真土を三種の名目で示し、第十二・十三願に報いた土であることが示される。

真仏土巻の引用文は、引文導入語・引文指示語によって分類把握する事ができる<sup>⑤</sup>。これらの役割を再検討すると、①引文導入語「言」「曰」「云」、②引文複合指示語「已上抄出」「已上抄要」、③引

文指示語「已上」、④引文指示語「抄出」「略出」「略抄」、の四段階

で使い分けられている。また、真仏土巻最長の引用である「涅槃經」については、引文指示語によると五つに分類できるが、前半七文は親鸞真筆の「見聞集」涅槃經文(南本系)、後半六文は同じく親鸞真筆の「大般涅槃經要文」(北本系)、或いは源信の「往生要集」<sup>⑥</sup>「一乗要決」と共通・関連する文から、二つに大別することができ、次のように分類することができ、これに前後の御自釈を加えたものが真仏土巻の構成といえる。

〈引文導入語〉

〈群〉

〈構成要素〉

〈引文指示語・分類基準〉

經「言」

大經群一 「無量壽經」「如来會」

「已上」

二 「平等覺經」

「已上」

三 「大阿彌陀經」

「已上」

他經群一 「不空羶索經」

「已上」

二 「涅槃經」一・二・三

「見聞集」との関連

三 「涅槃經」四・五

「大般涅槃經要文」との関連

論「曰」

天親

「淨土論」

「已上」

曇鸞

「論註」「讚偈」

「已上抄出」

釈「云」

善導

「觀經疏」「法事讚」

「已上抄出」

憬興

「述文贊」

「已上抄要」

### 第三章 真仏土巻の撰述と曇鸞引文

最後に、親鸞の真仏土巻撰述過程を考察し、その思想の源泉と変容について明らかにし、曇鸞引文の位置付けを考察する。坂東本

『教行信証』第四冊真仏土巻は、第三冊証巻に次いで前期筆跡時の様相を残すとされ、その筆跡変遷については、既に赤松俊秀氏や重見一行氏等によって紹介され、現状の坂東本に至る過程などが示されている。<sup>⑧</sup>

一、本文執筆 前期筆跡 五八―六三歳頃 一葉八行書

本文加筆 本文とほぼ同時 頭註(九・三五・四八・五四・五七・六八)

『論註』八字(五三)

墨による訂正(六七)

二、改訂 中期筆跡 七〇―七五歳頃

書改 後期筆跡 八〇歳前後 『涅槃経』追加(三三)

『涅槃経』自筆書改(三二―三四)

『涅槃経』他筆書改(四一―四四)

朱書(五・七五)

三、補筆 八四歳以降

外題(一)、標拳(二)

また、紙面の上下余白にある矢印のような「合点様の記号」なるものや、『大阿弥陀経』の「光明中之極明」「諸佛中之王也光明中之至極也」等に見られる傍線などによって、坂東本の訂正・確認作業の様相や親鸞の注意した箇所や文言が窺えるが、ここで注目するのが真仏土巻に複数確認できる引文接続部の錯綜状況である。坂東本真仏土巻は主に前期筆跡に属するが、『大阿弥陀経』・『不空羂索経』間、『涅槃経』・『浄土論』間、『論註』・『讚偈』間、『讚偈』・『玄義

分』間、『述文贊』・真仏土結釈間の各接続部等に大幅な書改や切り取り、散佚等の錯綜状況が見受けられる。第一に、『大阿弥陀経』・『不空羂索経』間の切り取りである。坂東本真仏土巻一四頁(真蹟二・四〇八頁)は、六行書に続く二行分が切り取られ、次頁から白紙である。<sup>⑨</sup>『大阿弥陀経』最終行には一―二文字分の空白がある。赤松氏は、『不空羂索経』の新規引用による『涅槃経』始文の切り取りではなく、現一六頁の『不空羂索

以下五行を残存するために、一四頁最後の二行、袋綴一枚の表面八行、一六頁三行の計十三行が切り取られたとの見解を示している。字数でいえば周辺の頁に合わせて一行十五字とすると、一九五字程が削除された様である。当初は「無量寿経」の諸本・註釈書類が続くか或いは御自釈があったと推測される。

第二に、「涅槃経」・「浄土論」間は、「涅槃経」引文後半の仏性に関する文の改訂・書改で、三八頁の貼紙による追加と、計四枚分の書改がこれに当たる。赤松氏は、坂東本真仏土卷三一・三四頁（「真蹟」二・四二五・四二八頁）について、信巻宿紙部分と同時期かそれより早い時期の親鸞自身の筆致であるとし、一行当たりの字数が多いことから三五十六字の「涅槃経」文の挿入を想定している。また、三八頁（「真蹟」二・四三二頁）の貼紙は三一・三四頁に近い筆致と認定し、四一・四四頁の書改部分は引用文の逸脱あるいは料紙の破損によって行巻一一・一二頁（「真蹟」一・二二一・二二三頁）と同様に細書が困難となったために弟子に依頼して四頁分にまとめた他筆であろうとしている。当所は、尊連書写前の三八頁貼紙追加によって本文が確定し、後の専信本書写の前に貼紙等による雑多な状況について、体裁よく繋ぐ為に修正を施したと考えられる。実際に、書改の最終行である坂東本四四頁（「真蹟」二・四三八頁）第八行の「浄土論」が二十字と周辺の行と比べて著しく字数が多い。

第三に、前期筆跡の「論註」・「讚偈」間の接続部である。以下三点が坂東本の書誌的特徴である。

①「論註」最後の八字「不差故曰成就抄」は、袋綴を切り開いた左裏面（「真蹟」二・四四七頁）に存在し、教行寺本では袋綴の裏面に直接記入される。大正期修復時に袋綴が切り開かれた可能性が高い<sup>④</sup>。

②「讚偈」初めの二十五字「讚阿弥陀仏偈曰覺辯和尚造南無阿弥陀仏釈名無量寿傍経」が欠落している。江戸期模写本五本共に二十五字を欠くが、専修寺本・西本願寺本は本文中に記載する。坂東本五四頁（「真蹟」二・四四八頁）の頭註「鸞和尚造也」は二行程度の大きさの貼紙の存在を示唆する。

③坂東本五四頁本文は「尊賢亦曰安養」の割字で始まり、右端の折り返し部分に墨書がある。

当所は、前期筆跡による草稿脱稿後から親鸞七五歳時の尊連書写までに複数箇所改訂がなされたが、「涅槃経」・「浄土論」間の様な書改はなされず、その結果散逸等の錯綜状況が生じている。尚、専修寺本では「讚偈」初めの三十一字について二行分で示していることから、このような貼紙が存在していたと考えられる。

第四に、前期筆跡時の「讚偈」・「玄義分」間の接続部は、「讚偈」引用終了から「玄義分」までを切り取って圈と線で指示し、「玄義分」一頁目を折り返している<sup>④</sup>。「讚偈」最後の引文指示語「已上略抄」から釈書に移行するものであるが、当初は報土の名目を初めて出した道綽「安樂集」の三身三土義の文等が挿入されていた可能性がある。しかし、善導の報身報土説には、道綽の挙げた「大乘同性

經』に加えて、『大經』の第十八願意が論証として挙げられるため、道緯『安樂集』の意がここに包含されて、善導の『玄義分』が採用された。

第五に、坂東本真仏土卷六九・七一頁の切り開きと裏面への『述文贊』記入、及び『述文贊』と真仏土結釈の接続部である。<sup>④</sup>赤松氏は、当初は六九頁五行・七一頁最後の二行分・七二頁が接続していたが、『述文贊』十行二〇三字の書入れのために添削作業が施されたとする。また、平成版影印本の解説では、坂東本真仏土卷六九頁と七一頁の末尾二行を半葉とし、七二頁を半葉とする一紙からなる元袋綴じであったとし、この前半葉のうち第六行目と七行目の五文字分相当分を切り取ったと指摘している。<sup>⑤</sup>字数でいえば、坂東本七一頁に示された善導『法事讃』の最後「号曰無上涅槃」六字と、『法事讃』原文で続く「国土則広大莊嚴徧滿自然衆宝」（真聖全一・六一五頁）の十三字、「已上」が一字分、真仏土結釈初めの「爾者」二字の計二十二字がこれが相当すると推察でき、『述文贊』をここに挿入するために、削除・改訂を加えて現在のような状態となったと考えられる。

以上、坂東本における書誌的問題点と引文接続部の錯綜状況を検討した結果、前期筆跡の本文執筆直後に特に「讚偈」「述文贊」を中心に大幅な移動があったこと、尊蓮書写前の中期筆跡に依る改訂で本文がほぼ確定したこと、後期筆跡によって「涅槃經」後半の仏性部分が消書し直され、真仏本転写の八三歳頃には現在の様な形態

に落ち着いたことが分かる。そして八四・八五歳時の一頁・外題と二頁・標拳は「釈蓮位」に預ける前の坂東本真仏土卷の完成を意味するものであろう。

こうして、前期筆跡時か、それに近接した時期における添削作業があったことが分かるが、この坂東本真仏土卷における切り取り箇所は、引文前後の御自釈における真仏・真土の釈に應じた主題の転換点に大きく関連している。前述の様に、真仏土卷御自釈では真仏に四種、真土に三種の名目が示されるが、この記述を基に、真仏土卷御自釈における真仏・真土の別に着目して引文の分類に再検討を加え、引文毎の役割を体系的に捉え直す中に論部及び疊疊引文の位置付けを試みる事ができる。

まず、真仏は、真仏土釈の「不可思議光如来」は「如来会」の「不可思議光」や「讚偈」後半の「南无不可思議光」、真反对弁「無量壽經」の「無辺光仏無礙光仏」は真仏土卷「無量壽經」引文第二の第十二願成就文、更に「如来会」「讚偈」「述文贊」に十二光・十五光讃として引用される。同じく「諸仏中之王也光明中之極尊也」は真仏土卷「大阿弥陀經」で引用する文の一部、同じく「淨土論」の「婦命尽十方無礙光如来」は真仏土卷「淨土論」中の語である。次に、真土は、真仏土釈・真反对弁の「無量光明土」は真仏土卷「平等覺經」引文、真反对弁の「諸智土」は信卷大信釈本願成就文「如来会」引文第四、「究竟如虚空广大無辺際」は真仏土卷「淨土論」中の語である。

また、他経や善導引文についても、真仏土結釈との連絡関係がある。『不空羂索経』は、前述のように『平等覚経』に続く仏土名の入要であろう。一方、『涅槃経』については善導と関連している。

真仏土結釈は坂東本の当初は善導の文に直接接続しており、真仏土結釈には『涅槃経』二文と、それに続いて馬鳴撰とされる『起信論』（実際は飛錫『念仏三昧宝王論』の文）が御自釈内引文に近い役割で引用される。「如来真説宗師釋義」によると安養淨刹は眞の報仏土であり、惑染凡夫は煩惱によって仏性を見ることができないが、本願力回向によって安樂仏国に至って必ず仏性を見ることが、『涅槃経』引用後半部の衆生仏性の引用が裏付けする役割を持つ。一方、善導については、真仏土結釈のように安養淨刹眞報土についての引用である。前半は『無量壽経』第十八願を中心に弥陀報仏報土と凡夫人報を証明しており、『淨土論』、『論註』から展開したものである。後半は弥陀仏土を「無為涅槃界」と称し「弥陀妙果号曰無上涅槃」と示したもので、涅槃の徳を示した『涅槃経』前半と関連する。また、当初は善導『法事讃』と真仏土結釈が連続していたと考えられることから、善導引文は主に眞土についてのものであるといえる。『涅槃経』と善導については、「如来」や「報身」とあることから仏身についての表現が見られるが、善導が「極楽無為涅槃界」とする様に、主に眞土についての引用であり、往生後に涅槃の徳を受ける土であることを示したものと見えよう。

尚、坂東本における『平等覚経』と前後の引文との接続状況につ

いては、『不空羂索経』の引用も含めた更なる検討が必要と考える。しかし、親鸞は坂東本執筆に当たって、当初は御自釈の様に眞仏と眞土に大別して眞仏土について構想し引文を蒐集したものの、本文執筆時或いはそれに近接した早い時期に経・論・釈の順に配列する構成に変更した。こうして仏・菩薩・凡夫と段階を踏んで最後の御自釈まで繋げることにより、本願力の回向によって眞土に到り仏性を得見せしめられるということが、次第に明らかになるように、眞仏・眞土の論証を進めたことが判明する。

同様に、論部においても眞仮対弁に示される『淨土論』の語を中心に展開されている。眞仏「帰命尽十方無礙光如来」は『讃偈』の十二光讃、眞土「究竟如虚空广大無辺際」は『淨土論』の偈文或いは『論註』の清淨功德文に連絡しうる。『論註』第一清淨功德成就文は「註論曰」と導入されるが、残りの五文は「云」で導入されている。この構成によって、清淨功德及び量功德を眞仏土の本質とし、その内実として法蔵菩薩の本願力と阿弥陀如来の善住持力の両者が相府する土で、三界を勝過することが示されている。このように盤鸞が総相とみなした清淨功德を中心に、以下五文を束ねる構造で眞土についての特徴が示される。これら五文は、因位の法蔵菩薩の清淨たる四十八願の所成と果位の阿弥陀如来の自在神力の所摂の土であることを繰り返して述べ、国土莊嚴の具体的な相にとらわれないことが示されていた。

## 結 論

親鸞の弥陀仏土理解の背景としては、道綽・善導系の弥陀報土説と凡夫人報説、更に源信の報化二土と仏性についての繼承があり、『無量寿経』所説の特に第十八願や胎化段に注目した釈義を繼承したものであったが、それらに先立つ『論註』は、『無量寿経』法蔵発願を基に『浄土論』を註釈したものとして、『讚偈』は、『無量寿経』を讃嘆したものとして、それぞれ菩薩の論書或いは傍経に高めて扱われた。

真実五巻を締め括る真仏土巻は、教行信証の根源である真仏土を示す一方、化身土と対置して示される。迷い惑う者に真実の因果を知らせるために顕したのが真仏土巻であった。その真仏土巻は、坂東本の切り取り・書き改め箇所を検討によって、執筆当所は第十二光明無量と第十三壽命無量の両願に報いた真仏・真土の別に体系化して引文を集めて配置されたが、本文執筆時、或いはそれに極めて近い時期に経・論・釈の順に配し直され、これによって真仏土の根源から次第に流れ出るような説示効果もたらされた。また、真仏土巻における疊鸞引文は、御自釈に示される『浄土論』の偈文を基点として、『論註』は真土について、『讚偈』は真仏について明かすものであった。真土についての『論註』は、清浄功德成就を「註論曰」と引用し、これを中心として以下「云」とする五文を束ねることとで、真仏土の成立基盤とその成就相と徳用について明らかにした。

このように、親鸞は坂東本『教行信証』真仏土巻の執筆に当たって、一旦は真仏・真土の別に引文を集めながら、執筆時に極めて近い時期に大胆な切り取り・削除などの添削作業を通して経・論・釈順に並べ直すことで真仏土の展開を明らかに示した。その論部に疊鸞引文を配置することで、『浄土論』の清浄・量功德の偈文から、先ず仏土の清浄性が成就していることを述べ、以下性功德文から不虛住持功德文にかけて、法蔵因位の本願力と弥陀果位の不可思議力が相府し、三界を超越した、廣大無辺際の実土であることを示すために疊鸞引文を連引したといえる。

### 註

- ① 『大正蔵』一一・二七二中下。
- ② 『大正蔵』一一・二七八上中。
- ③ 『大正蔵』四〇・八四二下・八四三上。
- ④ 『大正蔵』四〇・八四三中。
- ⑤ 『略論安樂浄土義』では安樂國の三界不撰、器世間と衆生世間の二種清浄による浄土が示される（『大正蔵』四七・一上中）。
- ⑥ 神子上恵龍著『弥陀身土思想展開史論』三二四―三二七頁、山本仏骨著『道綽教学の研究』三二五―三二八頁。
- ⑦ 『真聖全』一・三八二―三八五頁。
- ⑧ 『真聖全』一・四八七頁。
- ⑨ 『真聖全』一・五九二、五九七頁。
- ⑩ 『真聖全』一・八八九頁。
- ⑪ 『真聖全』一・八九八頁。
- ⑫ 『昭法全』三二八―三二九頁。
- ⑬ 『真聖全』二・四三四四頁。

- ⑭ 『浄土和讃』五八・六七・七一(『真聖全』二・四九二-四九三頁)。
- ⑮ 『浄土和讃』七三・八〇(『真聖全』二・四九四-四九五頁)。
- ⑯ 『浄土和讃』八七・九〇・九二・九三(『真聖全』二・四九六-四九九頁)。
- ⑰ 『真聖全』二・五八〇頁。
- ⑱ 『真聖全』二・一四四-一四六頁。
- ⑲ 『高僧和讃』二二・一六・二〇(『真聖全』二・五〇二-五〇三頁)。
- ⑳ 『高僧和讃』二五・四三・四五(『真聖全』二・五〇四頁、『同』五〇六頁)。
- ㉑ 『高僧和讃』七二・七六・八二(『真聖全』二・五〇九-五一〇頁)。
- ㉒ 『高僧和讃』九〇・九三・九六・九七(『真聖全』二・五一一-五一二頁)。
- ㉓ 『真聖全』二・六三〇頁。
- ㉔ 『真聖全』二・六六八頁。
- ㉕ 『愚禿鈔』(『真聖全』二・四五八頁)、『末灯鈔』第八通(『真聖全』二・六六八頁) 参照。
- ㉖ 『真聖全』二・五五一頁、五五六頁、五五八頁。
- ㉗ 『真聖全』二・四五九頁。
- ㉘ 『定親全』一・六八頁。
- ㉙ 『定親全』一・一九八-一九九頁。
- ㉚ 『定親全』一・二〇一頁。
- ㉛ 『定親全』一・二〇一-二〇二頁。
- ㉜ 『定親全』一・二〇九-二二三頁。
- ㉝ 『定親全』一・二二〇-二二三頁。
- ㉞ 『定親全』一・二二八頁。

- ㉟ 引文指示語等による分類は、鳥越正道著『最終稿本教行信証の復元研究』、藤場俊基著『親鸞の教行信証を読み解くⅢ―証・真仏土巻―浄土教は仏教であるか否か』、武田晋氏『真仏土巻』の構造について―書誌的視点と報仏土の開頭を中心として―(『龍谷大学論集』第四七一号) 参照。
- ㊱ 親鸞と『涅槃経』の関連を示した論考に、重見一行著『教行信証の研究―その成立過程の文献学的考察―』一四七-一六五頁や、土橋秀高氏『親鸞聖人と涅槃経』(『龍谷大学論集』第三二五・三二六号)、同『親鸞聖人の涅槃経観』(『真宗研究』第五号)、林智康氏『親鸞の涅槃経観』(『印仏研』第二号第二卷)、同『親鸞と涅槃経―肉食妻帯に關して―』(『印仏研』第二号第二卷)、吉田讓氏『宗祖と『涅槃経』―『教行信証』と』、『大般涅槃経要文』、『見聞集』との關係について』(『宗学院紀要』第五号)、同『宗祖の『涅槃経』依用の態度―源信の『一乗要決』と比して―』(『真宗研究』第四三三号)等がある。
- ㊲ 赤松俊秀氏『教行信証の成立と改訂について』(『親鸞聖人真蹟 国宝浄土真実教行証文類影印本解説』所収)一三一-一六頁、重見一行著『教行信証の研究―その成立過程の文献学的考察―』六一-一四頁、二二六-二四〇頁、三二四-三二七頁、三二九-三三三頁参照。尚、括弧内数字は、『増補版親鸞聖人真蹟集成』(以下、『真蹟』と略す)第二巻各頁の柱に記された坂東本真仏土巻の頁数である。
- ㊳ 教行寺本は、『大阿弥陀経』九十一字が化身土巻末、『日藏経』巻第九念仏三昧品中に挿入され、東本願寺本では化身土巻末後序に挿入されている(重見一行著『教行信証の研究―その成立過程の文献学的考察―』七一-七九頁、鳥越正道著『最終稿本教行信証の復元研究』七九頁)。
- ㊴ 『真蹟』二・四三三-四三八頁。
- ㊵ 坂東本江戸期臨写本五本は、共通して『真蹟』二・四四五頁と四四八頁を一紙とする袋綴で、教行寺本以外は、『論註』引用最後の八字の記述がない。(鳥越正道著『最終稿本教行信証の復元研究』五〇頁)。
- ㊶ 『真蹟』二・四五二-四五四頁、『讚偈』『徳若大小』以下の真仏土巻五八頁分は、教行寺本では化身土巻末、『日藏経』巻第十護塔品第十三の本文中に挿入され、東本願寺本では化身土巻末後序中に挿入されている(重見一行著『教行信証の研究―その成立過程の文献学的考察

一七九頁、鳥越正道著「最終稿本教行信証の復元研究」七九頁。

④ 「真蹟」二・四六三―四六六頁。

④ 「顯浄土真實教行証文類(坂東本) 影印本解説」四二頁。